現場から浄化槽の施策を考える 135

公営企業アドバイザー・前北海道大学大学院公共政策学研究センター研究員　遠藤　誠作

リスキリングによる浄化槽人材育成
～北海道浄化槽施工・維持管理技術者講習会～

◆学習の大切さ

企業も行政もこれからは人材育成が必要と、国をあげてリスキリング（学び直し）を進めている。これはノルマだと押し付けては効果がない。

真のリスキリングは各人が「学習の喜び」を感じることが鍵だ。リスキリングにより資格を取得したり成果を得た人からは「自信がついた」という声を聞く。新しい知識を得て、できなかったことができるようになるのは誰も嬉しい。この根源的な「学びの楽しさ」こそが、持続的な学習のエンジンになる。動画教材などが充実した今、学習への入口は広がっている。まずは学ぶこと自体がポジティブ（前向き・積極的）な体験であるという認識が必要。企業も行政も学び続ける組織であることが不確実性の高い時代を生き抜く条件である。特に文系を自認する人たちが苦手意識を持ちがちなIT（情報技術）、人工知能（AI）分野に関してこそ、率先して学ぶ姿勢が不可欠。デジタルトランスフォーメーション（DX※）などで組織に行動を促す際、経営者が「中身は分からないがやっておけ」では現場は動けない。自らが、新しい技術を知る楽しさを体感すべき。学ぶ楽しさを知った人材は、身に付けた能力・技術を仕事に活かしたい、さらには仕事を変革したいという気持ちになる。その意欲を受け止めるのは経営層の役割で、リスキリングは流行ではなく、組織を強くするための必然の流れである。

◆浄化槽の課題と最近の動きを理解

3月11日、北海道浄化槽協会（桔梗一憲会長）が「2025浄化槽施工・維持管理技術者講習会」を開いた。当日のプログラムは図のとおりで、午後は3会場で講義、会場には浄化槽機器物品9社の展示ブースも設けられた。研修会は各地で開かれるが、ここまで中身が凝縮された催しは珍しく、主催者は「全国浄化槽技術研究集会」の北海道版をイメージしていると聞いた。北海道は遠いので全国集会に参加したくてもできない人が多いためミニ研集的に開催してきたという。講習のタイトルに「施工・維持管理技術者」と入れ、齋藤夕子事業委員長による開会挨拶に主催者の意図が見て取れた。まさに浄化槽関係者が一堂に会したリスキリングである。なお、資料の一部は公開している。

◆浄化槽の開発の舞台裏

午後の3会場講義はどの会場も興味深いテーマが盛り沢山だった。A会場は浄化槽本体がテーマで、「浄化槽最浅、現場が変わる」として新型浄化槽CB型がカットモデルを使って紹介された。“最浅”である。浄化槽は現場の需要に応えて開発が進められた。コンパクト化、高度処理化、低炭素化と進み、今度は“最浅”化という。技術の進歩は目覚ましい。自分の地域に合った浄化槽の選択眼をもたないと浄化槽行政はできなくなると思いを新たにした。市町村の浄化槽や下水道の担当者もこの講習会に積極的に参加して学んでほしい。2時限では浄化槽の開発から発売までの流れを聞いた。浄化槽の開発については福岡県田川市参与として下水道に頼らない汚水処理システム構築に取り組んでいた頃から興味があったが、開発の話を聞く機会はなかったのでよかった。コンパクト化や最浅化は施工業者からは歓迎され、売り上げも伸びたと思うが、維持管理を考えた開発改良の取組みも聞いてみたい。

◆AIを使いこなす

B会場は浄化槽周辺機器がテーマで、①電磁式エアポンプの構造及びメンテナンス、②管理システムを使った浄化槽管理体験についてメーカーの技術者が丁寧に解説した。3時限目は「社内DXやAIを使った業務の効率化について」実際に現場で実践している事業者から入門的な知識と使いこなす心構えを聞いた。AIが社会も仕事のやり方も変える時代、AIが雇用を奪うのはまだ先だとしても、あまり考えずにできた仕事はどんどんなくなる。これからは批判的に物事を見ることや論理的な思考など、普遍的で深いスキル（身に付けた技能・技術、腕前）が一段と重要になってくる。AIに使われるのではなく使いこなす人材を育てるため、早い技術進歩に合わせて個人が自ら学び続けなければならない。会社も機会を提供しなければならない。AIをどう使うか、受講者は身近なスマホで体験して実感した。難しくしないで、便利さを自ら体験させることで引き込む教えはいい。AIに丸投げして思考停止にならないことが大切と識者はいう。

浄化槽施工・維持管理技術者講習会のプログラム

◆ニセコの浄化槽

C会場は浄化槽協会が主宰して、①浄化槽の機能保証制度と補修事例・脱炭素化推進事業の事例紹介、②地域の課題としてニセコ地区の現状と課題に対する昨年度以降の行政との取組みが紹介された。今や国際的な観光リゾート地になったニセコで汚水処理に奮闘する現場の話であった。海外から言語も文化も異なる観光客が大挙押しかけることで浄化槽も影響を受けている。高級な宿泊施設等が作られると浄化槽が設置される。中には人槽算定した以上に汚水が発生、冬季に除雪しながら維持管理する。浄化槽の点検・清掃等維持管理に苦慮する現場の話である。その排水の後段処理に人工湿地を応用する研究に取り組む体験は聞き応えがあった。

◆下水道の浄化槽転換とその後

小規模下水道の更新は財政的に無理な地域があると考え、下水道関係4省が連携して浄化槽転換の制度的支援の間口を広げようとしている。

先週のはじめ、「集合処理方式から個別処理方式への転換に関するQ＆A」が環境省等のホームページで公開された。また2月25日付け日本経済新聞の報道によれば国交省は秋の特別国会に下水道法改正案を提出するようだ。

公共下水道は都市計画法や下水道法等の手続きを経ないと転換できなく、下水道区域住民の同意がないと進められない。午前中の講義で「非効率な小規模下水道の中止・廃止の動きと浄化槽転換後の理想の維持管理体制構築」と題して、転換では維持管理体制をしっかりつくることも重要であることを呼びかけた。

※DX：デジタル技術を活用してビジネスモデルや組織文化そのものを変革し、新たな価値を創出すること。IT化は業務効率化や自動化が主目的だが、DXはそれを超えて企業のあり方そのものを進化させる戦略的取り組みである。

集合処理方式から個別処理方式への転換に関するQ＆A 概要

概要

○ 人口減少等に伴う使用料収入の減少や老朽化に伴う更新需要の増大など、下水道事業を取り巻く状況等に対応するため、経営改善の取組の一つとして、集合処理方式（公共下水道や集落排水等）から個別処理方式（合併処理浄化槽）への転換を検討する自治体が多くなっています。

○ 本Q＆Aについては、各自治体において、地域の特性等に応じた最適な汚水処理方式を検討・選択できるよう、検討の際の参考資料として、転換にあたって必要となる事務手続や活用可能な制度等について、Q＆Aの形でお示しするものです。

掲載内容

○ 浄化槽への転換を検討している自治体が直面した手続上の疑問点等を聞き取りの上、関係省庁が連携し、Q＆A形式で解説

○ 先行事例（静岡県南伊豆町など）の検討プロセスや政府予算案等を踏まえた活用可能な制度等について最新の情報を掲載

1.浄化槽転換の方向性の検討

Q、浄化槽転換を検討する際のパターンや転換の判断にあたって必要となる検討要素、転換までの実際の流れについて教えてください。
（→静岡県南伊豆町などの先行事例等を踏まえて、浄化槽転換にあたって必要となる検討事項や検討方法などを解説します。）

Q、浄化槽への転換にあたって、住民に対してどのように説明したらいいですか。
（→静岡県南伊豆町において実際に浄化槽転換を行った際の住民への説明内容等について解説します。）

2.下水道施設の撤去

Q、集合処理方式の既存施設を撤去する場合、不要となる施設や過去に受けた国庫補助金等はどのように取り扱えばいいですか。必要な手続きについて教えてください。
（→管路などの既存施設の撤去方法、法令や各省庁の規則などを定められている事務手続等について解説します。）

Q、既存施設の撤去にあたって、活用可能な国庫補助金や地方財政措置があれば教えてください。
（→令和8年度政府予算案等の内容を踏まえて、農林水産省や国土交通省の国庫補助事業や新たに創設された公営企業経営改善特例債について解説します。）

3.浄化槽の設置

Q、浄化槽を設置するにあたって、公共浄化槽と個人設置型浄化槽のどちらを選択した方がいいですか。
（→公共浄化槽と個人設置型浄化槽の整備手法の違いを含めて、それぞれのメリット・デメリットについて比較して解説します。）

Q、浄化槽を設置するにあたって、活用可能な国庫補助金や地方財政措置があれば教えてください。
（→令和8年度政府予算案等の内容を踏まえて、環境省の国庫補助金や下水道事業債等の地方財政措置について解説します。）

※ 今後、地方団体から追加で寄せられた疑問や各省庁の制度の見直し等を踏まえて、随時、更新を行っていく予定

関係4省による転換Q&Aの概要